

統一テーマ「ロマンス諸語における冠詞」

町田 健（とりまとめ）

1 はじめに

日本ロマンス語学会第53回大会の統一テーマは、「ロマンス諸語における冠詞」であった。この枠内で浅香武和、土屋亮、プヨ・バティスト、津田悠一朗（敬称略、以下同様）による4発表（持ち時間20分）が行われた。他に、山本真司がフリウリ語について発表を予定していたが、体調の都合で辞退せざるを得なかったのは残念であった。浅香はガリシア語の人名につく定冠詞、土屋はスペイン語のいわゆる中性の定冠詞と呼ばれるものの統語上の位置、プヨ・バティストはフランス語の定冠詞の数的相関性、津田は14世紀以降のトスカーナ方言の文学テキストを対象に冠詞を手掛かりとした前置詞句の名詞修飾に関する問題をそれぞれ論じた。このうち土屋、プヨ・バティストの発表は論文として、浅香の発表は報告という形で本号に掲載されている。

2 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と、それをめぐって行われた討議の概略を記す。

（1）浅香 武和「ガリシア語の人名定冠詞について」

ガリシア語では定冠詞の用法のひとつに、洗礼名の人名の前につける用法があるという。呼びかけを除いて、文中で *O Brais* や *A Maruxa* のように単数形で男性や女性の定冠詞が用いられ、これらは話し言葉の中で言及する人物に対して愛情や親近感、信頼などの意味を込めて用いられると説明されている。発表では、このような人名の前の定冠詞の使用に関して、文法書などでの記述を検討するとともに、周辺のロマンス諸語において同様の使用が見られるかどうか、ガリシア語の文学テキストにおける用例の分析や『ガリシア言語地図』を基にした方言的差異の分析などが紹介された。

総合討議では、所有詞の前に定冠詞を置く用法との関連や、洗礼名やあだ名、苗字などでは振る舞いにちがいが見られるのかなどが議論された。また、イタリアのある方言（フィレンツェのあたり）では女性の洗礼名につくが男性では苗字のみで、さらに *La Paula*

は友人のパウラで、Paula だと親戚のパウラとなるなどの例も紹介されたが地方差や社会的相違も大きいという。さらに、レト・ロマン語やルーマニア語では事情がより複雑であり、そもそも特定のある言語において人名冠詞の使用が可能か不可能かなどという議論自体の仕方に問題があるといった指摘もあった。

(2) 土屋亮「スペイン語におけるいわゆる中性定冠詞 *lo* の分類上の問題について」

スペイン語には他のロマンス語とは異なり、いわゆる「中性の定冠詞」*lo* というものがある。この *lo* の出現環境は多岐に渡り、1) 形容詞、2) *que* 節、3) *de* に導かれる前置詞句、4) 形容詞+*que* 節などといった要素を後ろに従える用法があり、古くから「冠詞か代名詞か」といった統語上の位置づけをめぐる議論が繰り返されてきた。発表では、内外の先行研究を整理し、それぞれの主張が準拠する用例などの検討が行われ、さらに *lo bastante* や *lo suficientemente* などの副詞につく *lo* なども検討しつつ、そもそもこの論争が決着のつく性質のものなのかということについても触れられた。

総合討議では、生成文法では通常、定冠詞と代名詞は統語構造上同じものとして扱われるが、この *lo* についてはどうかといった質問や、基本的には定冠詞であり、おそらく *lo* の持つ個別言語的特性から以上のような用法が拡大しているのではないかというような指摘がされた。

(3) プョ・パティスト「フランス語の定冠詞 LE・LA と定冠詞 LES における数的相関性について」

発表では、フランス語の定冠詞 LE・LA と定冠詞 LES の使い分けの条件の一つだと思われる数的相関性について論じられた。文法的には LES は LE・LA の複数形であることは間違いないが、機能的側面に着目すると、複数形 LES は単数形 LE・LA の複数をあらわすものとしては必ずしも用いられていないと思われる場合がある。フランス語の総称文を例にとって観察してみると、名詞句の数は単複の数的対立とは一見無関係であるにも関わらず、単数形 LE・LA と複数形 LES の使い分けには制限があることが分かる。そこから、単数形 LE・LA と複数形 LES の使い分けは、指示対象の数ではなく、むしろ指示対象の質によって条件づけられている、ということが言え、複数形においては総称性の低下が見られるとした。最終的には、フランス語における定冠詞の意味と使用を再検討することを通じて、単複の概念を再定義する必要があることも主張された。

総合討議では、具体的に扱われた例文についての解釈の可能性や指示対象の意味の安定化要因、総称性の程度の違いなどについて議論が行われた。

(4) 津田 悠一朗「イタリア語における前置詞句の名詞修飾 - 冠詞を手掛かりにした文学テキストの調査 -」

発表は、特に 14 世紀以降のトスカーナ方言で書かれた文学テキストを対象に冠詞を手掛かりとして前置詞句による名詞修飾について調査したものである。名詞修飾は、古典的なラテン語では、名詞の属格や形容詞、分詞、関係詞などによって行われるのが普通で、前置詞句による修飾がいつごろから広まっていったものかという問題に関心の主眼がある。

総合討議では、データには必ずしも名詞修飾とは言えないものも含まれ、厳密に評価するのが難しいのではないかと、他の前置詞や複合的前置詞などの扱いにも配慮すべきであるといった指摘があった。

3. まとめ

今回の統一テーマは、冠詞というロマンス語の統語論・意味論において重要な現象が取り上げられ、様々な言語について多様な冠詞に関する現象が報告・分析された。出席者の関心も高く、総合討議においては極めて活発な議論が展開された。今回は、統一テーマの発表が 4 名と少なく、言語もガリシア語、スペイン語、フランス語、イタリア語と限られていたものの、冠詞、特に定冠詞が持つ定性とのかかわりにおいて、親密さや愛情表現などのコミュニカティブな意味や総称性、定冠詞と代名詞という統語構造上関連するカテゴリーの問題などを通じて、結果的にロマンス諸語全体を射程に入れた議論が展開されたことは幸いであった。必ずしも解決されていない問題が少なからず存在することが示され、冠詞に関する研究が今後も統語論において大きな位置を占めるであろうことが再認識された。